

英語教育における学生の自立性の促進

生涯学習の立場からの異文化体験と関心喚起

Promoting Student Independence in English Education : Facilitating Cross-cultural Experiences and Stimulating Interest from the Standpoint of Lifelong Learning

永野篤*
Atsushi NAGANO*

<抄録>【Web上で公開します】

学生の感性や思考、新たな気づきや進化・成長といった内面的な変容は AI 時代の学生にとって重要と考えられる。筆者が教員を勤める短期大学で担当した「医療の外国語」という科目は英語を中心にドイツ語、ラテン語も含まれていた。受講者にはカリキュラム上やむなく履修したが英語の基礎レベルに課題があり、英語に苦手意識をもつ者も珍しくない。こうした層を対象に単語の語源や使い分けなど教養を意識した構成にしたが学生のニーズや関心事とは乖離があり授業の存在意義が疑われた。そのため「ドラマで学ぶ英語の世界～シェイクスピアから鬼滅の刃まで」へと科目名・内容を変え、言語ではなく文化を、知識より体験へ、現在ではなく将来の関心領域が自律的に広がる生涯学習型へとシフトした。

<キーワード>【Web上で公開します】

英語教育, シェイクスピア, 鬼滅の刃, Google アンケート, 自立性

1 英語学習の位置づけの難しさ

(1) キャリア開発総合学科の9つの分野

2016年当時、学科には「ビジネス情報・金融」「ファッション」など9つの分野がありその一つが「医療事務」であった。ある程度体系化された10単位程度の科目群が複数あり、そのセットの一つに「医療の外国語」があった。

(2) 医療事務における英語(外国語)の位置づけ

学生は医療事務にかかわる科目を中心に履修しており、その一環として「医療の外国語」を学ぶようになっていた。しかし知識、関心、動機のどれをとっても英語(または外国語)の授業を受容できるレベルではなかった。

(3) 授業における工夫の事例

授業における学びの動機づけは次のように行われた。

① 資格取得を推奨する

医療・医療事務に関する検定・資格は比較的難易度が高い。短大では奨励してはいなかったが授業ではそれらを取り上げ、学ぶ意欲を高めようと試みた。

② 実用に役立つことを強調した

簡単な単語やフレーズでも知っていれば役立つこともある事例を紹介し、演習に積極的に取り組めるようにした。

③ 語源から学ぶ

単なる暗記では退屈な学びになると想定されたため、語源からの意味など、教養的関心を喚起するよう努めた。

④ 英語ドラマを視聴する

医療が関係する映画を視聴させ、その物語に没頭してもらった上で、テキストにあるような単語・フレーズが、実際に映画の中でも使われており、学びが有効であることを理解してもらえようとした。

⑤ 役割を演じる

映画の登場人物に学生を割り振って、演じさせるようにした。

(4) 科目内容と教授の限界

授業アンケートからは、これらの試みは授業を成立させる上では多少の役に立っているようにも見受けられたが、その場限りのものであり、学びへの関心を深めていくものではないと考えられた。

2 生涯学習の授業における学生の受容度の確認

(1) 学生の体験と文字情報の受容の乖離

筆者は同時期、図書館司書の必須科目である「生涯学習概論」を受け持っていた。第一次、二次世界大戦の悲惨な経験を踏まえ国連から提唱された生涯教育という考え方の意義を理解するには、その歴史的経緯や思想性についての知見も求められる。しかし殆どの学生は世界史、日本史、政治経済等々前提となる知識に乏しく、前提そのものについて仔細に教授することが求められた。

(2) 映像資料の活用からドラマの視聴へ

歴史上の惨事や、それらを再び発生させないための情熱や決意などを学生が感得することは文字情報や言語による説明からでは難しかった。映像資料も活用したが痛々しい情景は直視させることも困難であった。そのため架空のドラマであり多くの学生にとっても周知の小説「図書館戦争」の映画を視聴させ、自由の概念、生涯学習の場としての図書館、国と地方行政の在り方などを検討させることにした。

(3) 生涯学習施設の訪問調査

教室内での授業とは別に、生涯学習支援センター(公民館)、図書館、博物館を訪問し、調査・研究させる機会も作っていた。コロナ禍以前には、高齢のボランティアの

方々による博物館での説明などもあり、直接体験での学びは学生にとって印象深いものになっていた。

(4) 物語と現実世界の融合の有効性

断片的ではなく、完全なひとつの物語を学生と共有し、その世界観から現実世界との接点を見出し、学生自身が現実世界における当事者であり、その課題について問題意識を深めていける可能性について手ごたえが得られた。

3 海外生活体験の推奨

(1) 短期留学、ボランティア支援制度の導入

授業において外国語を学ぶ機会を設ける一方(本学では、英語、フランス語、中国語、韓国語が学べる)、若い時の海外での生活体験が視野を広げる良い機会であるという考えのもと、短期留学、海外ボランティア活動への金銭的援助を行う施策を導入した。学内での入念な周知を行ったところ初年度の2019年には2名の学生が韓国への語学留学を行った。

(2) コロナ禍を超えて

2023年には1名の長期留学者(韓国)、3名の短期留学者(カナダ、オーストラリア、イギリス)があった。そのうち1名は1年生で留学後英検2級を取得した(在学中に2級以上の取得には奨励金がある)

(3) 学生の自主性の尊重

本制度は、学生の可能性を広げる後押しとして行っており、彼らは留学先を自由に選ぶ。これは彼らの自主性があるからこそ実現されるものである。現実世界における新たな体験に積極的に参与・没頭し、授業という仮想世界では得られない経験を得ることになる。

4 ICTの活用と教育人類学的アプローチ

(1) 英語ではなく異文化を体験する授業への転換

英語を学ぶのではなく、英語ドラマを視聴することで、その世界に没頭してもらうことを第一とした科目を新たに作った。「キャプテン・アメリカ」「ロミオとジュリエット」「鬼滅の刃(英語版)」「きみに読む物語」などの視聴を通じ英語という言語世界と、そこに取り込まれている文化(学生にとっての異文化)経験に重点を置いた。

(2) 全回を通じてシェイクスピアのソネットの暗唱

韻を踏んでいる表現は英語がわからなくてもその面白さを体感しやすい。「ロミオとジュリエット」のプロローグや、シェイクスピアの詩集「ソネット」を毎回暗唱した。詩以外の表現でも韻が踏まれているフレーズがドラマや歌に多く含まれており、台本が言語の意味だけではなく、音の響きも考慮していることを体感させた。

(3) 直訳ではなくシチュエーションに応じた表現

「鬼滅の刃」では、会話や主題歌の日本語が必ずしも英

語に直訳されているのではない。その場に合った意識や韻や音の強弱など、言語的工夫がなされていることに焦点を当てた。

(4) Googleフォームの積極的活用と共有化

学習において前提となる学生のレベルを把握するため、英語検定5級、4級、3級、準2級、2級までの「アンケート」と称した小テストを行い、学生が理解・受容できる範囲での構成に努めた。記憶の定着やアウトプットにも課題があるため、前回までの授業の振り返りを「アンケート」と称して頻繁に行い、浸透が十分でなければ同じような説明・演習・音読などを繰り返し行った。こうしたアンケートや小テストは、Googleフォームへ学生がスマホでアクセスし、回答収集後に結果をスクリーンに表示し、フィードバックしつつ課題について学生と共有するように努めた。小テストの出題範囲も比較的確確に示し、準備をすれば高得点になるよう動機づけを高めた。

5 総合的な英語・異文化への関心を喚起

ITの進歩に伴い、学生はネット上から断片的な知識を容易に得ることができる。簡単な操作でもっともらしい文章を作成し、アンケートのとりまとめも行いレポートを作成してしまってもできる。学生に課題を与え、学生がそれに応えるというパターンは学びの成果を数値で表す上では有効であろう。しかし大学としての大切な役割は、学生が卒業後もこの世界における課題について自ら発見・設定し解決に向かえるような自主性の涵養にある。そのためには自分たちが属している日本という世界のあり方、日本語の感性・思考様式が相対化され、他者の視点で自分(達)を探求させていく仕掛けの開発・実行が重要になってくる。

参考文献

- 永野篤「短期大学生の社会人・職業人教育におけるアイデンティティ確立の課題 ～アクティブ・ラーニングを通じた意識と行動の変容を通じて～」『聖和学園短期大学紀要』第57号 p63-76, 2020
- 永野篤「短期大学での外国語授業における多元文化構想の実現」『聖和学園短期大学紀要』第57号 p113-127, 2020
- 永野篤「英語学習における個別レベル対応の実現 -リアルタイム・インタラクティブ・コミュニケーションを通じて-」『聖和学園短期大学紀要』第59号 p33-53, 2022
- 永野篤「学習者のレベルが広い場合における英語教授の試み ～異文化世界の体験を通じて～」『聖和学園短期大学紀要』第60号 p73-88, 2023
- 永野篤「キャリア教育におけるチームワークと個人の力を伸ばす試み ～DXを活用し共有意識を高める～」『聖和学園短期大学紀要』第60号 p89-100, 2023